

介護職技能実習生に対するベトナム講師派遣 報告書

実施日：平成30年9月18日～10月20日まで33日間

実施場所：ベトナム ハノイ ホアンロン教育第二センター

報告日：平成30年10月24日

報告者：社会医療法人生長会 福永 一雄

「介護職技能実習生に対する講師派遣」のため、ベトナムハノイへ33日間の出張について講義の展開・ベトナムでの生活を通して文化や習慣などを理解することができたのでここに報告する。

I. はじめに

平成30年7月25日に健康・医療戦略推進本部にて改訂されたアジア健康構想に向けた基本方針において、地域包括ケアシステムの考え方・自立支援に資する介護は紹介すべき日本的介護とされている。大阪APSCONソシアムでは、アジア健康構想の一環である、外国人技能実習制度 介護職に関する知識・技能の移転、日本・ベトナム間の人材還流を目的として派遣講師としてベトナムで活動した内容を報告する。

II. 授業について

1. 技能実習生について

1) 各クラスの日本語資格取得状況

Aクラス：7名 1名 N3取得済 6名 N4取得済

Bクラス：5名 4名 N4取得済 1名結果未

Cクラス：10名 N4未取得

2) 各クラスの日本語レベルについて

Aクラス

1名がN3取得しており、残り全員がN4を取得している。説明のスピードについて、学生より「12月にN3の試験があり、勉強のためにもう少し早く話して欲しい」と希望があり。日本で会話する程度の速さで十分に理解している。N4レベルは、基本的な日本語を理解することが目的である。しかしN3レベルは、日常的場面で使われる日本語の理解することが必要である。そのため、学生の要望通り日常会話で話す速さで講義を進行する。日本語の理解も出来ている。

Bクラス

1名以外はN4を取得しているが、日本語レベルは未習熟だと考える。会話の速さについても、少し速くなると理解出来ていない様子である。しかし学生同士のコミュニケーションや通訳の講師が、翻訳することで理解出来ている。介護に関する言葉については理解出来ている。

Cクラス

全員がN4未取得であるが、日本語については渡越前の情報と大きく相違があった。日本語の習熟度合は低いが、学生同士のコミュニケーションが多く日本語について教

え合うことが多くみられた。会話の速さは、Bクラスと同程度で理解している。

2. カリキュラムについて

1) 各クラスの講義内容と進捗状況

Aクラス

技能実習制度(介護職種)入国後講習用教材

〔介護の仕事を支える考え方
介護の仕事に必要な知識と技術〕

講義

講義では、介護の考え方である「人間の尊厳」「自立支援」について説明した。その人らしさ、こだわりなど、日本では当たり前使用する言葉が、学生には理解出来ないことに戸惑いはあったが、言葉を言い換える・具体的な事例

を用いて説明することで理解出来たのではないかと考える。日本の言語は、曖昧な表現が用いられることが、とても多いことが授業の中で痛感した。また、同じ意味であるが、言葉が何種類もあることに対する戸惑いもみられた。例えば、大切・重要・大事など。患者・利用者・入居者など使用する場面が違う言葉は説明出来るが、最初に述べたような単語については、講師は同じ意味の言葉を、幾つか使用し同じであることを伝えていく必要があると考える。授業の進捗状況については、遅れることなく、自己の担当に関しては終了している。入国後講習用教材は、比較的復習の箇所が多いため、介護職員初任者研修テキストを使用し、学びを深められるよう授業を行った。

実技

実技は、介護職種 技能実習評価試験

初級のチェック項目を参考とした介護技能実習評価表をもとに、体位変換・移乗介助

食事介助・排泄介助を実施した。介助

では、説明と同意・自立支援に向けた声かけ確認・介助後の体調確認・安全面へ

の配慮など基本的な介助動作を中心に指導

を行った。声かけの際に、介護の専門

用語での声かけがみられたが、声かけの

タイミング介助動作・介護事故の予防の

周囲の環境の観察・感染管理などについては、

理解し実施出来ていた。介助前の説明と同意、自立支援の声かけや出来て

いることの確認や観察のポイントについては何度も繰り返し実習した。



Bクラス

外国人のためのやさしく学べる介護の知識・技術

認知症の理解・障害の理解

こころとからだのしくみと生活支援技術

排泄・睡眠

技能実習制度(介護職種)入国後講習用教材

介護の仕事を支える考え方

講義

認知症についての講義では、認知症の疾患自体については理解出来ている。しかしもの忘れ以外の症状については理解出来ていない様子である。

認知症については、中核症状と行動心理症状の関係性について、細分化し説明を行った。

最初は難しい様子であったが、実際に自分が

認知症の人の立場になるとどう感じるか、不安になるのかなど自己に置き

かえることで理解が深まったのではないかと考える。現在、日本の65歳以上の高齢者の7人に1人が認知症と推計されており、高齢者施設における認知症の割合も90%を超えていることが多い。認知症について正しく理解することは必要不可欠と言えるのではないか。障害についての基本的な考え方、ICFの考え方などは図事例を用いることで理解出来た。入国後講習用教材の介護の仕事を支える考え方については、介護職員初任者研修テキストを活用し、尊厳・エンパワメントを理解した自立支援についての学びを深めた。Aクラスと同様に、介護の専門用語の理解は出来ているが、曖昧な表現については理解が難しく聞き直すことが多くみられた。都度、アプリの使用や通訳の講師の協力にて理解してもらうようにした。

実技

排泄・睡眠についての実技を実施した。

排泄については、介護実習モデルを使用しベッド上でのオムツ交換を行ったが、確認の声かけが少なかった。そのため、学生に高齢者体験スーツを着用(ゴーグル・重り・関節可動域制限)し実際に体験することで自分達の声かけが少ないことで恐怖心や不安感が多くみられることを体験してもらい、声かけの重要性や必要性について理解を促した。自立支援については、何度も繰り返し実習することで、観察の視点や声かけの方法などは身についたと考える。実習中、最初は講師の説明通りに実習していたが、体験や繰り返し実習することで、何故必要なのか?提案などがみられるようになった。

介助に対して、根拠を求めたり質の高い介助を実践したいという意欲を持ったからだと考える。



Cクラス

外国人のためのやさしく学べる介護のことば

身体介助(食事・入浴・排泄)

レクリエーション

リハビリテーション

巡回・巡視、勤務体制

その他の言葉、日本の生活、会話例

講義

項目毎の介護の言葉や、日本で使われている物の言葉について復唱することで理解を深めるよう講義を進行した。

介護の物品は初めて見るものを多く、テキストは、イラストのみであり想像出来ないとの意見がみられた。そのため、写真をパワーポイントに落とし込み、言葉だけではなく視覚へのアプローチをすることで、理解に繋がったのではないかと考える。視覚へのアプローチは、物品だけでなく、日本での行事についても、写真と動画を併用することで効果的であったのではないかと考える。

講義の中で、歳のお祝いについて授業した際に、ベトナムでは70歳でお祝いをすることを学生より教えてくれた。日本とベトナムの文化の違いについて、授業の中で多く知ることが出来たこと良かったと感じる。

会話の授業では、関西弁や方言などは学生には伝わりにくいことがわかった。他のクラスでも感じたことだが、標準語の日本語を勉強しているため、地方の方言など理解が難しい。学生

は大阪周辺の施設または病院への配属であるため、方言などについては、フォローしていく必要がある。

講師期間中で、外国人のためのやさしく学べる介護のことばが終了し、評価テストを実施したが、平均が95.1点と介護のことばについては理解していることが評価できると考える。



全クラス、講義予定に遅れなどはなく終了している

Ⅲ. ベトナムでの生活について

1. 学生とのコミュニケーションについて

学生とコミュニケーションを図る時間は、授業以外ではほとんどなく休憩時間や休日を活用しコミュニケーションを図る必要がある。目的として、講師がベトナムの文化や歴史、風土などを理解するだけでなく、学生の想いや日本へ行くことに対する不安などを、事前に把握し出来る限り軽減できるような体制の構築を図ることを目的として関わっていくことが重要である。学生と休日を過ごすことで、講師に対する尊敬と気配り、心配りを感じることが出来た。講師のために、自分達も行ったこと



がない場所へ案内してくれたり、故郷を案内してくれたり、少しでもベトナムの良さや歴史、自分達のことを理解して欲しいという気持ちが伝わってきた。また、自分達の故郷を大切に思っていること、家族を大切に思っていることがコミュニケーションを通じ感じることが出来た。日本に対する不安についても、生活面・介護の仕事に対して具体的に不安だと感じていることを聞く機会になり良かったと考える。



2. 生活について

初めての海外での長期滞在と食生活の不安なども多くあったが、現地で生活支援をして下さった坪氏をはじめ、サポートしてくれた学生達のおかげもあり不自由なく生活出来た。休日には、ベトナムの歴史がわかる場所や娯楽なども体験することが出来た。また、ベトナムにおける日本製品の入手についても日本企業の進出により手に入りやすくなったことが、案内をして下さった場所などからも理解することが出来たと考える。生活の不安要素として、標準言語がベトナム語であり、店での注文や会話、移動手段がタクシーであったため、ベトナム語を話さなければいけない機会があり、坪氏や学生に教わることも出来た。学生からは、休憩時間を活用してベトナム語講座を開いてくれ、講師自身も語学を学ぶことの大変さを痛感した。学生は、ベトナム語も声調などがあり学習が難しいと言われているが、日本語は平仮名、片仮名、漢字があり、学習がとても難しいと話していた。

食生活においては、不安が大きかったが食べることが出来た。最初は、衛生面や辛さ、香草などが少し気になっていたが、食事を重ねる毎に、美味しさがわかるようになり伝統料理や果物など様々な料理を食すことで、学生とのコミュニケーションを図るきっかけになった。学生は講師がベトナム料理を食し、感想を話すことで、とても喜んでくれ、講師や母国に対しての思いを知ることが出来た。



IV. まとめ

講師派遣においてベトナムで1カ月余り生活し、学生へ講義を行うことで様々なことが明確になったのではないかと考える。期待としては、学生の成長が著しいこと、日本語だけでなく、介護の知識や技術についても日本の介護の専門職が指導すること、また学生から大阪APSコンソーシアムを選択した理由でもある最新の介護機器を使用して技術を指導することでより専門性の高い、質の高い介護が身につけていることが実感できた。学生の成長には、前任の講師の方々が、学生がエンパワメントできるよう指導してきたからだと感じた。アジア健康構想の基本方針でもある、自立支援を資する日本的介護が学生に伝わっている結果だと考える。学生が日本に来る時期への不安を話すことがあるが、講師として自信を持って日本へ送り出すことが出来るレベルに近づきつつあると感じている。課題としては、前述でも述べたように、日本語の曖昧な表現や同義語についての理解を深めていく必要がある。習慣の相違についても、受け入れ体制を整備していく必要が急務である。



V. おわりに

今回、ベトナムでの講師を経験することで学生が安心して来日できるよう第2フェーズに向けて準備が必要なことや、体制などが明確になった。大きな課題として、自分達が現在、実践している介護は技能移転できる日本的介護なのかと問われると、不安要素がある。声かけ・自立支援など学生に指導している自分自身も見直す必要がある。

それは、講師経験をしたからこそ学生の介護に対する思いや姿勢を見て、自分達の介護を見直していくことが重要である。今回の大阪APSコンソーシアムの活動は、外国人技能実習生への技術移転だけでなく、自分達の介護を見直し、更なる日本的介護の実践をする機会でもあるのではないかと考える。

最後に、このような貴重な機会を与えて頂いたこと、今回の講師派遣が無事に遂行できたことは大阪APSコンソーシアムに関わる全ての方々、自施設の方々、実習生の方々、すべての方へ厚く御礼申し上げます。

